

**HELP THE HORSE  
TO  
SAVE THE SOLDIER**



GOOD-EYE, OLD MAN  
Illustration by FRANKLIN D. COLE

**PLEASE JOIN**  
THE AMERICAN **RED STAR** ANIMAL RELIEF  
National Headquarters, Albany, N.Y.

別れはいつも突然だった

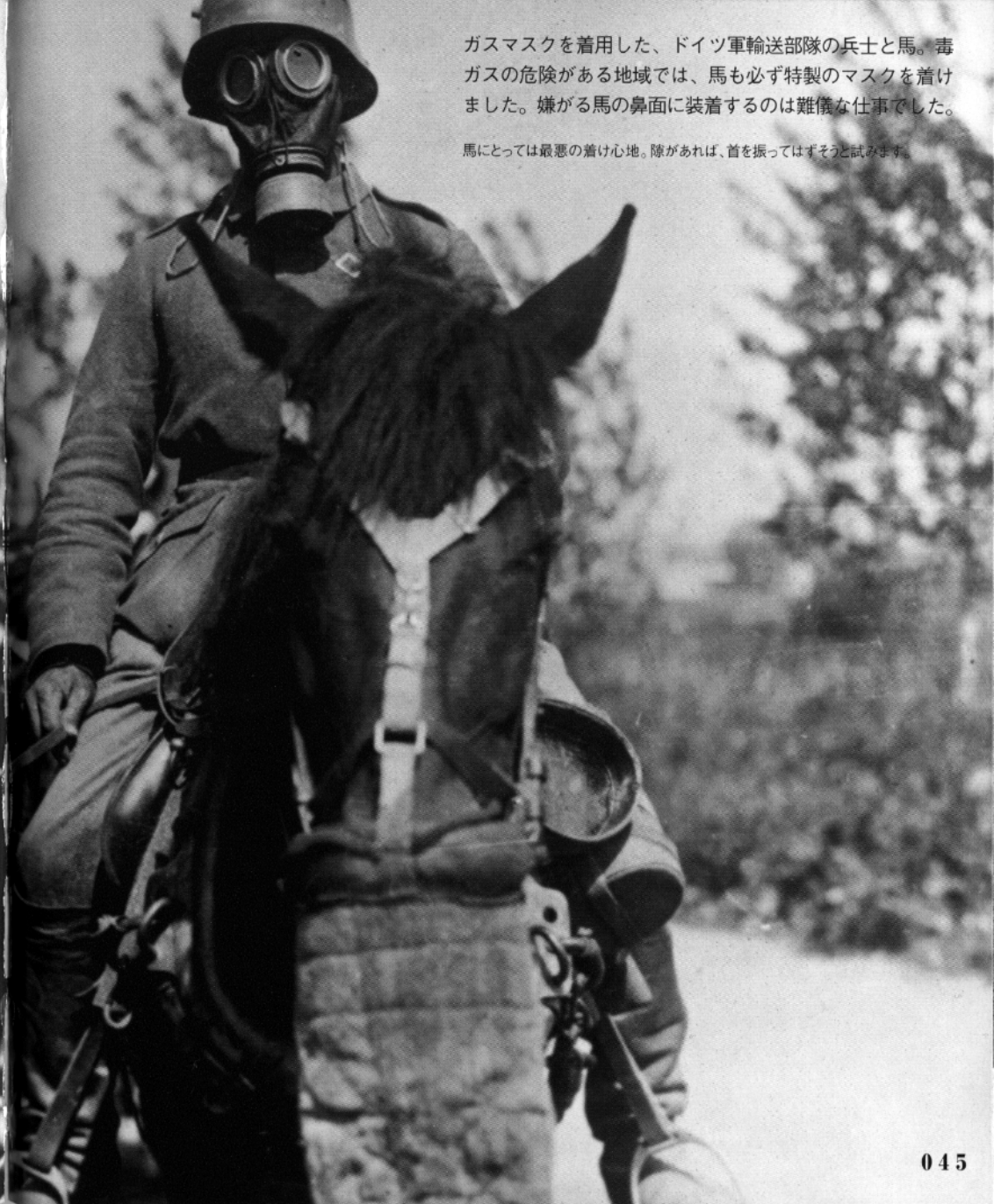
敵軍に占領された町に、パラシュートで伝書鳩を投下。運よく味方のレジスタンスがみつけたら、敵の拠点が町のどこにあるのかなど、情報を託して飛ばすことができます。

けれど敵にみつかってしまったら…パラシュート鳩の運命は過酷です。



「シェアミ」という名のアメリカ軍の伝書鳩は、フランスのアルゴンヌ上空で銃撃され、片脚を失いました。もう一方の脚も吹き飛ばされ、かろうじて残った靱帯に書信をぶら下げて届けました。

傷ついても撃たれても、飛び続ける。司令部というゴールを目指して。



ガスマスクを着用した、ドイツ軍輸送部隊の兵士と馬。毒ガスの危険がある地域では、馬も必ず特製のマスクを着けました。嫌がる馬の鼻面に装着するのは難儀な仕事でした。

馬にとっては最悪の着け心地。隙があれば、首を振ってはずそうと試みます。



1918年、イギリス連邦軍南アフリカ旅団の隊員たち。行軍の途中、作戦の成功を期してベットのヒビが檄を飛ばします。動物の中には、軍曹など階級を与えられるものもいました。

鼻息荒いヒビ隊長。神妙に聞くべきところ、つい笑いが漏れます。